若手の活躍できる場を関西に　上方歌舞伎役者

『封印切』おえん（99.4 松竹座）[写真提供＝松竹株式会社]

2004年の新春を、1月2日に大阪松竹座で開幕する「壽初春大歌舞伎」の芝居観劇で迎える人も多いことだろう。

中村鴈治郎や中村富十郎、中村吉右衛門はじめ中村梅玉や片岡我當など、歌舞伎ファンにはたまらない豪華メンバーによる新春公演となる。

26日まで行われる同公演では、昼の部に『南総里見八犬伝』や『封印切』、夜の部では『鬼一法眼三略巻』や『人間万事金世中』、『俄獅子』などが上演される。

この中で『封印切』の井筒屋おえん、『俄獅子』の芸者お松を演じるのが、大阪に住み、“和事”と言われる上方独特のきめ細やかでやわらかい芸風を演じる歌舞伎役者の片岡秀太郎さんである。

「『封印切』では、父の仁左衛門や弟仁左衛門、鴈治郎さんの相手役の梅川を随分させていただきました。今回梅川は息子の翫雀くん（中村鴈治郎さんの長男）で、私はおかみさんのおえん役に回りますが、情感がまた違うわけで、そのあたりも見ていただければ」とソフトな口調で話す。

このおえん役でも分かるように、秀太郎さんが得意とするのは、上方ものの女形である。

新歌舞伎俳優名鑑（演劇界臨時増刊平成13年12月刊）はこう評している。

（前略）

とくに上方物の女形がいい。近松座で演じた『天網島』の小春やおさん、『冥土の飛脚』の梅川などは、原作の味を伝えるキリッとした女になっていたし、近松を改作した和事狂言の『封印切』の梅川、『河庄』の小春では和事の女らしい和らかさを見せる。同じ小春や梅川にしても、原作と改作では人間像に違いがあるのだが、それをわざとらしくではなく、上方物の匂いに包んでさり気なく表現する。このように、役と作品に応じて使い分ける柔軟な芸を持っている。花車方の『封印切』のおえんや『吉田屋』のおきさなどは当代屈指であろう（後略）

観劇の参考にしてほしい。

芸能一家に育つ　稽古漬けの中・高生時代

秀太郎さんは十三代片岡仁左衛門さんの次男として大阪で生まれた。現在、兄は片岡我當さん、弟は十五代目仁左衛門さん。姉は舞踊家の花柳寿々さん、妹は新劇女優の片岡静香さんという芸能一家である。

それはともかく、物ごころがついたころから、「夜遅くても一家団らんで御飯を食べるのですが、そこで

プロフィール　片岡　秀太郎（かたおかひでたろう）さん

1941年、大阪市生まれ。十三代片岡仁左衛門の次男。46年10月南座「吉田屋」の禿（かむろ）で初舞台。56年3月大阪・歌舞伎座「河内山」の浪路で二代目片岡秀太郎を襲名する。97年から毎年8月に自主公演「関西歌舞伎中之芝居」を99年まで道頓堀中座で開催。一方で、上方歌舞伎役者養成のため松竹が97年に設立した上方歌舞伎塾の主任教授として指導に当たり、02年には同塾の卒塾生を起用した「平成若衆歌舞伎」を立ち上げるなど、上方歌舞伎復興のために尽力している。受賞歴は87年、94年国立劇場優秀賞。97年度十三夜会年間大賞。99年第20回松尾芸能賞優秀賞、大阪芸術賞。03年10月伝統文化ポーラ賞ほか。

出てくるのは芝居の話ばかり」という毎日を過ごしている。そんな中で、『宇治のホタルは火を伸ばす』という練習が登場する。「火を伸ばすの“ひーを”が何秒続くかやってごらん。ストップウオッチをお父ちゃんが見てやるから。あ、15秒か。もう1回やってごらん。あ、1分になった。偉かったね。それがセリフに生きてくるからね」といわれ、遊び感覚で覚えたものだ。『鯛の目』という稽古もある。同じ音で「たいのめ」と発音し、次は低い音で「たいのめ」。こどもの「たいのめ」はかわいく幼い声で、おばあさんの「たいのめ」は低いしわがれ声で発音する。「鯛の目がいくつ言えるかな。そうそう、うまいうまい」と褒められて覚えた思い出。「ゲーム感覚で稽古をしましたね。遊びも芝居ごっこばかりでした。そういう中で育って、それが全部肌についているって感じですね」。

中学から高校にかけても、放課後は踊りや長唄、常磐津、義太夫と稽古漬けの毎日が続く。「中学も高校も劣等生（笑）。でも、当時は稽古での早引きが認められた。今はとんでもないですがね（笑）」。なにしろ、初舞台が満5歳というから、学業を続けながら各種の芸事を習い、舞台にも立つという生活である。だが“役者の次男坊”の進路に、迷いのあるはずがなかった。56年3月には大阪歌舞伎座の『河内山（こうちやま）』の浪路で二代目片岡秀太郎を襲名。父、十三代目仁左衛門の元で上方芸を習得するのである。

父も兄も弟も立役（男役）という一家の中で、ただひとり女形として歩んできたのは、「女形は誰でも20歳ぐらいまではやるのですが、わたし器用貧乏で何でも適当にやってしまうから（女形が）残ってしまった。野球で言えば、兄や弟はクリーンナップの人ですが私はバンドでも生きる人間ですから。選球眼もいいし（笑）。でも2番か7番がいいところ」と、「最下位でも応援しつづけていた阪神タイガースファン」らしい自己分析をしてみせる。だが、役者としての評価は高まるばかりだ。「父をはじめ多くの先輩の相手役を勤め、古典から新作まであらゆる役を演じ、それが大きな財産になっている」（演劇界）と。

上方歌舞伎伝承に力「若衆歌舞伎」も立ち上げ

京都、大阪、東京と各地の舞台に出演している秀太郎さんだが、その一方で上方歌舞伎の伝承にも力をそそぐ一人である。

「（歌舞伎で演じられる）義太夫狂言というのは、上方で生まれた。それがどんどん東京に流れて、東京の役者さんが演じている。私達兄弟3人がいますが、兄も弟も東京で、その子どもたちも江戸っ子なんです」。関西に残っているのは、秀太郎さん、嵐徳三郎さん（故人）、坂東竹三郎さんに、若手では秀太郎さんの養子愛之助さんと、数えるほどだった。

「このままでは上方歌舞伎が消滅してしまう」と3人に呼びかけ97年、大阪道頓堀の中座で「関西歌舞伎中之芝居」を立ち上げる。この自主公演は、松竹が中座を売却（その後中座は焼失）する99年まで続けられた。

関西に歌舞伎役者をと、松竹が「上方歌舞伎塾」を開設することになったのは、大阪松竹座の新装開場の97年。一般公募で希望者を募り、2年間の専門教育を経て歌舞伎界に送り込もうという試みで、主任講師に秀太郎さんが選ばれたのは自然の成り行きだった。

現在、3期生までの18人が卒塾し、秀太郎さんや仁左衛門さん、鴈治郎さんなどの門下生として舞台に立ちはじめている。

秀太郎さんが心を砕いているもののひとつに、昨年立ち上げたばかりの「平成若衆歌舞伎」がある。「大阪に仲間のいない愛之助の活躍する場を関西で作り、卒塾生を生かすための場をつくる」のが狙いで、既に2回の公演を成功させている。出演・演出も兼ねる秀太郎さんは「単なる勉強会ではなく、高校生や大学生にも親しみの持てる新作古典歌舞伎を披露する場にしたい」と熱っぽく語る。秀太郎さんの視線の先にあるのは、いつも上方歌舞伎の今後なのだ。

（文・脇本　勤／写真・高島悠介）

♥壽初春大歌舞伎の番付プレゼントあり。詳細は31ページ。

平成若衆歌舞伎「新・油地獄大坂純情伝」けいこ場風景［写真提供＝シアター・ドラマシティ］